

パキスタン・ガンダーラの旅

ニューヨーク州立大学

伊藤 藤 宣博

ラホール

ラホールの飛行場に着くと国立大学のラフク・カーン教授が出迎えてくれました。教授は二時間位待ったという事でしたが、民族衣装の腰下まで長いシャツの背中がビシヤビシヤで、もう暗くなっているのに三十四、五度もありそうな暑さでした。我々が夏に行った事もあってホテルに案内してもらってもホテル内もそれほど涼しくなく、ラホールの第一印象は噂どおり何

しろ暑いという事でした。ラフク・カーン教授は科学を永年教え、奥様もアラブ語を大学で教えています。教授は一日割いて車で市内を案内してくれたり、二晩も続けて夕食に招待してくれ、地元の食事を御馳走してくれました。話によると、パキスタン人のほとんどが農業に携わるか、兵士として生計を立てています。政治が安定せず、従來の地主・豪農制度と軍部の影響が強く、近代化、産業化には未だほど遠い感じがします。殊にカシミヤ地方はインドとパキス

タン両国にとり唯一の風光明媚で肥沃な山岳地帯なので、一九四八年の独立以来国境紛争が絶えません。

ラホールはパキスタンで二番目に大きい、人口五百万の都市ですが、文化的にはムガル時代の建築物が多く見られ非常に美しい町です。ラホールは盆地の為か、パキスタンで一番暑い地域の一つだそうです。灌漑水路が町の至る所に作られ、その両脇に並木が続いて国内でも一番きれいな古都という感じでした。次の日は早速そのムガル建築の粋を極めたバードシャーヒ・モスクとラホール砦を旧市街へ見に行きました。バードシャーヒ・モスクは十七世紀にムガールの皇帝によって建てられ縦百三十メートル、横百六十メートルあり、中庭は一面巨大な石だたみで、一遍に十万人が礼拝できるといふ世界最大級のモスクです。我々が行った時には何しろ暑く、石が焼けてしまうので、人が通

る場所には雑布が切れ目無く並べられ、歩く人が火傷をしない様にその上から絶えずバケツで水をかけて雑布を濡らしていました。モスクの四隅には赤砂岩で作られた高いミナールがあり、西側には大きな葱坊主型の大理石ドームがあります。その中が礼拝堂で天井のドームや壁全体に色とりどりのアラベスク模様が施されています。

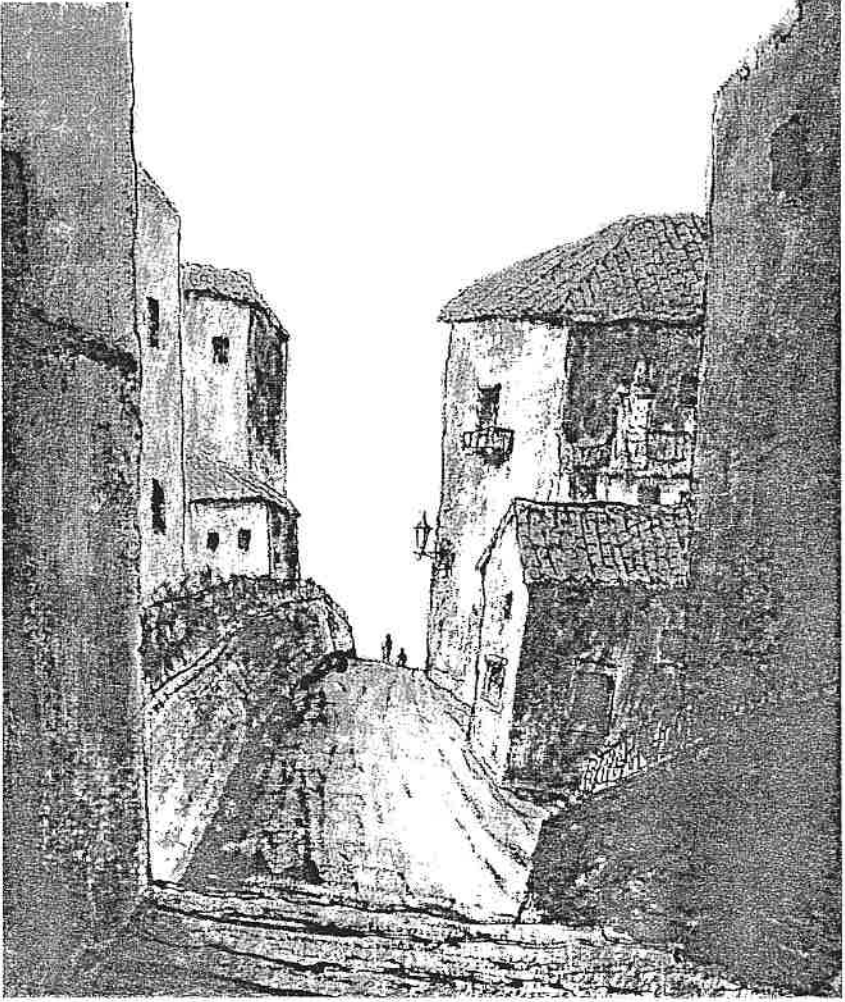
このモスクと隣り合わせにあるのがラホール砦です。ムガル朝三代のアクバル帝の時代に原型が作られました。巨大な建物で各皇帝が好んで使った広間や閲見の間があります。この砦の特徴は赤砂岩をレンガ状に積んである事と屋根の水落しにライオン・象・孔雀などの動物をあしらった事です。この様にアクバル時代のムガル建築にはヒンドゥ教の影響が強く、五代目のシャーハン帝の時代になるとペルシャ風に赤砂岩のかわりに大理石を利用してペ

ルシャ風の図柄や象眼細工のタイルによるモザイクが見られるようになります。

旧市街から出てすぐの所にラホール博物館があります。この博物館もムガル式ゴシック建築で、パキスタンでも一番有名で立派です。ガンダーラの仏教美術品の他にはイスラム教の彩色文書が数多くありました。日本にも来た事のあるガンダーラの断食仏陀を再度見ました。これは二世紀後半の作ですが、東京で見た時はきれい過ぎる感がありました。熱気のある薄暗い建物の中で見ると断食仏陀はより迫力のあるすこみのあるものでした。ここはほとんど人がいなくていくつもある断食姿の彫刻を心ゆくまで眺める事ができました。ガンダーラの石の浮彫や彫刻の像はインド文化とギリシャ文化の特徴を併せ持ち、顔の彫りも深く、袈裟もギリシャの彫刻のように襞の多い見事なものです。

タキシラ

ラホールから首都のイスラマバードのすぐ隣の町ラウルピインディに飛びました。インドのデリーとニューデリーのようにラウルピインディとイスラマバードは隣接する姉妹都市です。イスラマバードは新興都市なので、区画整理のゆきとどいた官庁街、商店外があるので、ラウルピインディは昔からの雑然とした庶民的な町です。文化、風俗、習慣に関してはラウルピインディの方が面白いと思いました。ここから北西三十五キロの所にある町タキシラにガンダーラ最大の遺跡があります。この地方に仏教を紹介したアショカ王の死後五十年位してアレキサンダー大王の子孫に当るバクトリアのギリシャ人がガンダーラ地域に着てタキシラという町を造りました。ここは中国とイラン等の中近東を結ぶ南のシルクロードの町で、東西南北の



交易に非常に栄えました。二世紀頃には中央アジアから来たクシャン族が権力を握り、有名なクニシカ王の時には仏教が非常に栄えて何千という僧院や仏舍利が建てられました。遺跡全体は二十六平方キロにも及ぶ広大なものです。

先ずタキシラ博物館に行き、タキシラ遺跡全体の立体模型を見て全体の感覚をつかみました。ここの博物館には他にも「仏陀の一生」と題する多くの石の浮彫パネルの展示があります。博物館から歩いて四十分位の所にダルマラジカという仏教遺跡があります。数多いタキシラ仏教遺跡の中でも最も古く重要です。アシヨカ王の時代に仏舍利を納めて建立した物と考えられています。多分紀元前三世紀頃に、パキスタンで最初に建設されたストゥパで最も大きい物の一つです。このストゥパは西側の一部が大きく切り取られています。泥棒達が仏舍利の入った金の棺を捜して切り取ったものと考えられ

ます。大ストゥパの回りには多数の小塔や祠堂があり、これ等は裕福な信者達が加護を祈って寄進したものです。これ等は紀元前一世紀から西暦四世紀位の間に建てられました。

タキシラの次の遺跡はシルカップと呼ばれるバクトリアのギリシヤ人により紀元前二世紀に建てられた町です。門から少しずれて南北に巾、車二台分位の大路があり、この大路を挟んで各ブロック毎に家が建ち並んでいた様子です。又、そのほとんどのブロックには仏陀かジャイナ教のストゥパが建てられており、金箔を付けたドームが回りの壁から良く見えました。この町には井戸が無く水は西壁の外側にある河から運び込まれていました。大路の出口を出た延長上にハティール山があります。これがギリシヤ型の都市に共通のアクロポリスになっていたのでしょう。数ある祠堂の中の一つに中央に前方後円の仏塔を納めた祠があります。ちょ



ダルマラジカ

タキシラ



うどインドのアジャンタ等の石窟寺院で見られるチャイティア窟のように祠の後の半円形の所にストウパがあり、それを囲んでアーチ状に柱か壁があったと考えられています。大路のほかにストウパの四角い基壇が残っています。その腰壁にはコリント式の柱頭飾りがあり、壁柱の間にはギリシャ風の三角破風、インドのチャイティア・アーチを持つ戸口があり、その上には双頭の鷲が乗っています。双頭の鷲は中央アジアのモチーフなので、インド、イラン、ギリシャの三文化の融合の結果として知られ、これを双頭の鷲のストウパと呼んでいます。大路の東側にストウパが沢山あるのですが、このストウパの形が独特です。インド本来のストウパは基壇も円形で全体に丸い形をしています。このタキシラやガンダーラで一番初めに作り出されたストウパは基壇の部分が四角です。その上半球形の本来のストウパの形を作っています。

その四角の基壇も四角い台という単純な物ではなく、基壇の側面に壁柱を何本もつけて飾ってあります。方形の基壇の付いた柱はギリシャ・ローマ建築にはごく普通に見られ、この事はガンダーラ仏教美術が強くギリシャ・ローマの影響を受けている事を示すと考えられています。

シルカップの南ハティアル山の上にはクナール塔と僧院の跡があります。クナールはアシヨカ王の息子でタキシラの総督をしていましたが、義母におとし陥れられて父親から嫌疑をかけられていると信じ、その罰として家来に自分の目をくり抜かせました。その場所にストウパが建てられ、目の見えない人達の巡礼の場となりました。今でもここはパキスタンでは最良の目の病院があるので目の不自由な人達が集まる場所です。

ガンダーラ以前の仏教では信仰の対象は釈尊ゆかりの地や、釈尊の遺骨を納めたストウパ等

でしたが、ガンダーラ時代に入るとバクトリアのギリシヤ人が来て、この時代に培われた現実的な考えで、人間の姿で表わされた仏陀を受け入れる素地が徐々に作られていったようです。

クッシャン族が権力を持つようになってからはローマ世界からやって来た工人により見事な浮彫や仏像が作られました。ガンダーラで多く見られる浮彫は、釈尊が出家する為に馬を引いてこさせ宮殿を出る場面、釈尊の六年間の苦行を彫った苦行の釈尊、釈尊による初説法を描いた場面、斜線が地上と天井を往復する為に通った道、三道の宝階と、それに釈尊の入滅をあらわす涅槃があります。

ペシヤワ

ラウルピインディからペシヤワ（ペシヤール）に飛びました。ペシヤワが州都である北西フロンティア州はアフガニスタンと千百キロの

国境線を有し、カブル川とスワット川に挟まれた肥沃な土地です。又ここはガンダーラ王国の中心地でもありました。ペシヤワは国境の町であり、インド大陸と中央アジアの接点でもあります。旧市街には、伝統的なバザールがあります。ここは過去百年ほとんど変わった様子がありません。ここでは日用品の売買と同時に白と黒のターバンを巻いたパタン人を見かけ、中には兵器や麻薬の売買を行う人もいるそうです。パタン人はアフガニスタンとの国境を挟んで両側に住んでいる部族で、勇敢な部族として知られています。町を西に向けてちよつと行くと、あの有名なカイバース（峠）となります。残念ながらも今でもアフガニスタンとの国境は不穏で外国人は通る事ができません。

西暦一〜五世紀の間仏教王国であるガンダーラは史上類のない平和と繁栄の時代を経験し、中国、インド、それにギリシヤ、ローマ等の地

中海地方まで含めた交易路の中心として栄えました。そのガンダーラ盆地の中心がペシャワでした。スワット川とカブール川に囲まれて大きな人口を支える事ができ、又千六百もあつた僧院の僧達が毎日托鉢に行く事ができる大きな町だったわけです。

ペシャワの東北八十キロの所にタフティ・バイ(タフティ・バハイ)というガンダーラの山岳仏教寺院の代表的なものがあります。遺構の保存状態も良く、建設当時は白い漆喰で全面が覆われていましたが、今でもところどころ白い壁が残っています。一世紀頃に建てられ七世紀頃まで使われていた寺院で、僧院とストウパのある塔院とが隣接しています。現在ストウパは基壇が残っているだけですが、その周辺の祠堂は沢山残っていて、昔の姿が容易に想像できます。中庭に沢山ある祠堂やその中の仏像、ストウパは裕福な巡礼達により寄進された物で、金

タフティ・バイ



箔を貼った仏像や釈迦の一生を描いた浮彫等が飾られていました。僧院の二階に僧達が使った個室があり、壁には小さな窓と二つづつ小さな棚が作られており、一つがランプ用、もう一つは個人の持物を置く場所だった様です。めいそうにふける中庭や雨水を屋根から取り込んだタンク、台所、食堂、トイレまであったようです。

ギルギット

ギルギットは標高千五百メートルの山に囲まれた奥深い所にあります。それでも一九七八年にカラコルム・ハイウェイが建設されてから非常に発展しました。雨はほとんど降らず、作物は回りの山々の雪溶け水によって灌漑されています。ギルギットへの飛行機は今でも有視界飛行なので天候が悪いとキャンセルになりますし、ギルギットは標高が高いので飛行機の重さを軽くしないと離陸できないので、飛んで来た

旅客全員が又飛行機で帰るのはほとんど不可能な所です。こういう難しい条件の中で飛ぶ飛行機ですが、もし飛ぶとすばらしいマウンテン・フライトでラワルピインディ出發後、カガーン溪谷の上を飛び、次にナンガニバル山の山腹すれすれに飛び、スリルがありました。

ギルギットは四方数百キロに亘り唯一の市場のある町ですので、商人が中央アジアやパキスタン内部のパンジャブ州、シンド州からやってきて、金曜日以外は毎日市場が開かれ、山羊からパラフィンランプに至るキャンプ用品、贅沢な陶磁器、中国からの絹織物に至るまで種々の物が売買されており、なかなか盛況でした。

フンザ

我々はここからミニバスに乗り四時間カラコルム・ハイウェイを走ってフンザ地域の中心地カリマバードに向います。カラコルム・ハイウ

エイはヒマラヤ・カラコルム・パミールの各山脈を通り抜け、インダス川、ギルギット川、フンザ川に沿った中国とパキスタンを結ぶ昔のシルクロードの南路です。ハイウェイとは言っても我々の考える様なものとはかなり違い、砂利道で山腹の獣路を少し上げた、やっとバスが一台通れる位の道です。そのかわり景色はすばらしく、下に氷河から流れ込んだ灰色の水が流れる川を見下ろし、所々に点在する部落を眺め、杏や他の果物、それに馬鈴薯等の野菜の段々畑の門を通ると、正しく桃源郷を思い起させます。フンザ地域はジョン・ヒルトンの有名な小説『ロスト・ホライゾン』で桃源郷と呼ばれ、見渡す限り石垣で囲まれた小さな段々畑が並び、そこいら中に植えられた背の高いポプラが段々畑の横線と氷河のある高山の稜線に映えています。フンザ人の長寿の神話は、楽園に住んでいる為ストレスが無く、杏を沢山食べ、動物脂肪が少

ない食事のせいだと言われています。年寄達が健康である事は事実なのですが、皆が百二十歳迄も生きるといふ話は大袈裟で、多くの人々は見た目よりも実際にはもつと若いと思われれます。フンザでの生活は北部パキスタンの他の地方と同様厳しいです。杏を多く食べる事は事実でも無駄にしません。種は燃料となり、種の中の味は粉になったり、油を搾ったり、その糟は飼料となります。つまり桃源郷とは神が造った楽園では無く、人間が汗水を流して荒地を人が住める程度にまで開墾した努力の賜として頭に描いた理想郷だとしみじみ感じました。

フンザは約二千四百メートルの高地にあり、一九七四年十月迄フンザ王国として内政一切藩主に任せられたパキスタン国内の自治王国でした。現在この藩主制は廃止されましたが、それでも独特の王国的雰囲気は残っています。フンザが独特の雰囲気を作るもう一つの要素は、こ

この人々がイスマイリ派のイスラム教である為です。この宗派の宗教指導者はアガ・カーンで、アガ・カーン基金を作り、学校や病院を建設して住民の福祉の増進に努めています。イスマイリ派の戒律は多くの宗派と比べて非常に緩やかで、例えば普通五回しなければいけない祈りも朝晩二回で、普通女性はモスクの中では隔離された女性用の席に坐りますが、この宗派では入口こそ別ですが、中では男女入り混ざって礼拝できます。他の宗派では義務となっているメッカへの巡礼や一カ月間の日中の断食もしくても良い事になっています。特に現アガ・カーン（四代目）は強い指導者で、特に女性に対し教育の重要性を説き、女性の社会参加を積極的に勧めています。カリマバードに居る間にアガ・カーンの女子校を参観する機会がありました。が、パキスタンの社会一般から見てもかなり進んだ教育が行われていると強く感じました。校

舎もとてもきれいで、現アガ・カーンが宗教指導者としてだけでなく経営者としてもかなり優秀なのであろうという印象を持ちました。

カリマバードの宿を出て二キロほど段々畑の中を歩いて行くとアルティッドの砦に出ます。五百年前のこの藩主の城です。フンザ川迄三百メートルの絶壁の上に建っており、確かに砦と言われる様に川の側からは絶対に攻められない場所に建っています。三階建てで小さな部屋がいくつもあります。地下には穀物倉と土牢があり、ここに入られると真暗な中で暮らさなければならず、食物も時々しか与えられなかったようです。三代前には藩主の座を争ってここで兄弟が殺し合ったという話が残っています。牢に行く為のドアの横の柱には何か気味の悪い創が残っていますが、これは税金として納められた穀物の勘定を表した物に過ぎない様です。二階は藩主のアパートで寝室や王座のある部

屋、台所、風呂場、トイレ等があります。王座とは言っても木のベンチのような物で、全てとても質素です。屋根の上には先ず見張台があり、その他武器倉庫とモスクがあります。モスクやそれぞれの部屋の木のドアには彫刻が施してあります。モスクの奥に渡り廊下があり、その先には二十世紀の藩主の家があります。現在は藩主の親戚でこの砦の管理をしている家族が住んでいます。現藩主は、実際の政治的権力はありませんが、別の所に大きな屋敷を構えて住んでいます。屋上からはこの砦のすぐ下にあるアルティット村の住居が見え、女の人達が彼等の泥の家の屋上で農作物を干したり、実を取ったりして農作業をしているのが良く見えます。

翌日ギルギットにバスで帰るはずでしたが、当日はアシュラーの日に当りました。アシュラーはシーア派の第三代イマム・フセインが殉教した日で、シーア派の男達はこの日村に集まっ

てフセインの苦痛を追体験しようとして胸を拳で打ちながら行進します。中には血だらけになる人もいて深刻な祭です。この為に、たとえバスの運転手がシーア派のイスラム教徒でなくても彼らのしきたりを見無視すると、その仕返しを恐れてバスは全て止まってしまいます。パキスタンのトラックは極彩色の模様が描かれていてなかなかきれいですが、この時期は皆、お葬式のような黒いリボンをトラックの所々に結び付けて走っています。次の日朝早くやつとギルギットに向けて出発し、ギルギットから飛行機でラワルピンディに帰る予定でしたが、案の定席が取れずにカラコルム・ハイウェイを十八時間かかって帰りました。なかなかスリルのある夜行バスでした。

フンザからカラコルム・ハイウェイを北東に行くくと中国との国境に直ぐ到着し、その先がシルクロードで知られたカシュガー(カシュガル)

です。カシユガー經由で来た日本人学生にも数多く会いました。この事はパキスタンの若者達が国境近くに行き、中国から密輸入された安い商品を買ってラワルピンディやラホールに持ち帰り、小遣いを稼いでいるらしく、夜でも所々で、我々の乗ったバスが止められ、税関吏がバスの屋根の上には山積みになっている荷物を嚴重に検査し、脱税者から集金している姿を何回も見ました。

カラチ

カラチに着き、日本貿易振興会の石橋さんにお目にかかる為にホテルから電話をした処、何しろ危険なのでホテルのハイヤー以外では外出しないようにと注意されました。お目にかかってから伺った話によると、カラチは死の町と呼ばれ、毎日何十人と殺されているとの事で、毎日、新聞にも何処で何人死んだかを記した地図

が載る位だそうです。これはパキスタン独立直後にインドから来たパキスタン難民達と元々、カラチに住んでいるパキスタン人の間の争いで、社会問題、経済問題が深刻となり、この二つのグループの争いも厳しいものになっていきました。助言に従いタクシーでカラチ国立博物館に行きました。ここは、今回我々が行かれないなかつたモヘンジョダロの遺跡の説明や、そこから発掘された物が多く展示されています。とても興味深く、実際に行つて見て来たような感じでした。

モヘンジョダロは四千年の歴史を持つインダス文明の遺跡でレンガ造りです。この町ができてから二千年後に建てられたストウパがあります。古代のアクロポリスと言われる要塞化された丘の上に建っていて、この要塞の中にはモヘンジョダロの行政庁、宗教関係の建物、公共風呂、国家の穀物倉、宮殿、集会場の跡が残つて

いるそうです。インダス川に面したこの遺跡は驚くほど進んだ文化がこの川沿いにあった事を表わしており、この中央集権型の社会はインダス川流域から西北にカブール迄、南はデリーまでも続いていたそうです。アシヨカ王の出たモリヤン時代には仏教が保護されて非常に繁栄しました。

結 び

普通インドの北部から中国・日本に伝わった大乘仏教とビルマやタイ、スリランカ等の東南アジアに広まった小乗仏教と言われますが、今回のパキスタンの旅は仏教の西への波及の源を見る事ができました。しかも仏教は東洋の物とされ、キリスト教等の宗教と比べられがちですが、ガンダーラ仏教王国はギリシャや地中海諸国の建築や彫刻とインドというアジア文化を融合させました。黒田方丈の留学僧制度も初めは

アジア諸国から始まりましたが、近年はアメリカやヨーロッパにも及んでいる事を考えると、仏教には東西の境は無く、古来の人が東西南北、至る所に仏教を広めた様子を見してきました。

今日パキスタンは回教国となり、仏教の面影は各地に点在する美術館や遺跡に見られるだけになってしまいました。過去に過激な回教徒がアラアの神以外の礼拝を禁じて仏像の顔を破壊したり、寺院を壊したりしましたが、少なくとも現在のパキスタンは過去の仏教伝統を保存保護しています。